

「甲子園での躍動」

広陵高等学校

甲子園常連校、広島代表広陵高校の背番号「1」。
チームを3年ぶりの甲子園に導いたエース左腕。

Ginjiro Hiramoto

平元銀次郎

野球にかけた、三年間。

ATHLETE OF FUKUCHI

躍動、福智のアスリート。

全国4千校、16万人の高校球児の夢の舞台、甲子園。阪神甲子園球場を舞台に、14日間の熱戦が行われた第99回全国高校野球選手権大会で、福智町出身の平元銀次郎投手が所属する広陵高校は、10年ぶり4回目の準優勝を果たしました。

広陵高校は部員数142人、夏の甲子園に22回の出場経験を持つ広島県屈指の名門校。1回戦から優勝候補との対戦が続く中、ほぼすべての試合に先発した平元投手は、恵まれた長身と長い手足から繰り出すストリートを武器に、強打者たちをことごとく封じ込め、決勝に進出。前評判を上回る躍進に、広陵高校と平元投手への期待と関心は日増しに高まっていました。

周囲から常に甲子園出場の期待を受ける広陵高校で、1年生から試合に出場する平元投手。故郷を離れ、家族や友人と過ごす時間、自分のための時間をすべて野球に費やしてきました。今とこれからの人生をかけた魂の3年間。福智が生んだエースが迎えた初の甲子園。最後の夏に見せた躍動と、そこに至るまでのみちのりをご紹介します。



才能伸ばした指導と 中2で決めた本人の覚悟

平元投手が野球を始めたのは金田小2年生の頃。野球経験者の父・**征明**さんが礼儀を学ばせようと地元の金田Jrクラブを見学したことがきっかけでした。入部当初は野球のルールも全く知らなかった平元投手ですが、すぐにその才能を発揮。指導した**寫田**監督は「始めてボールを投げたとき、しなやかな腕の振りを見せ」この子は違う』と思った」と印象を語ります。4年生で試合に出場し始め、チームの中心となった平元投手は6年生の時、プロ12球団が編成するジュニアチームで、約500人の中から18人の選手に選ば。「福岡ソフトバンクホークスジュニア」のエースとしてベスト4入りに貢献し、県大会では延長8回で22奪三振を記録するなど、輝かしい実績で一躍注目される選手となりました。

金田中入学後は田川地区を拠点に活動する硬式野球チーム、西日本スコピオンに入部。部員数も少なく、目立った成績をあげず、チームではありませんでしたが、父・征明さんも指導を受けた坂本年昭監督を慕っての入部でした。



広陵高校への進学を決めたのも坂本監督の勧めがあったとのこと。中学2年生の3月、広陵の練習を見学してすぐに進学を決意。父と祖母の3人暮らしの家庭を離れ、野球に打ち込む覚悟を決めました。真摯に野球と向き合い、ひたむきに努力を続ける平元投手の姿勢は寫田監督と坂本監督、2人の指導者から受けた「人間性を重視する指導」によって培われました。



決勝の対花咲徳栄高校戦で2回裏に自らタイムリーヒットを放つ平元投手。



上/スタンドを学校のテーマカラーであるえんじ色に染めた広陵応援団。左/8月23日の決勝戦、全ての球児が憧れる満員の阪神甲子園球場。右/今と変わらないダイナミックな打球フォームの小学校時代。

強豪の重圧と挫折 一生の仲間との出会い

全国からの新入部員が50人を超える広陵高校。全員が寮で生活し、携帯電話の所持も禁止。公衆電話は月に1回5分以内。帰省は年1

全力投球の姿に 子どもたちが重ねた夢

8月23日、迎えた広陵高史上初の優勝をかけた決勝のマウンド。先発は平元投手。本調子からほど遠く、準決勝の先発を見送られた中で、中井哲之監督の「最後はエースの銀次郎」との期待を背負っての起用でした。惜しくも昨年夏に亡くなった坂本監督の遺影もスタンドで見守った一戦でしたが、結果は実力を出し切れず敗退。3年間追い続けた目標にはわずかに届きませんでした。観戦した寫田監督は「本人は納得していないかもしれないが、銀次郎は子どもたちに夢を与えてくれた。ありがとうと伝えたい」と健闘を讃えました。

母校の金田中でも関係者や在校生が決勝戦を観戦するなど、町全体が注目した夏の甲子園。平元投手の全力投球は町に感動を与えました。熱戦から1か月後、甲子園で優秀な成績を納めたチームらが参加する愛媛国体に出場した広陵高校は、ついに、頂点の優勝をつかみ、有終の美を飾ります。



↑後場でのパブリックビューイングに駆けつけた金田Jrクラブも、試合終了まで声援を送り続けた。

国体で登板した平元投手は「甲子園では悔しい思いをしたけど、最後にやると念願の日本一になることができた」と喜びを語りました。「今しかできないことに全力で取り組みたい。その経験がいつかきつと役に立つと思う」と福智町の子どもたちにエールを送った平元投手。卒業後は長年の夢であるプロ野球選手を目指し、さらなる力をつけるため大学への進学を予定しています。平元投手の甲子園決勝を観戦した金田Jrクラブの相浦颯太郎くん(金田小6年)は「平元選手が2回にタイムリーヒットを打ったときは絶対に逆転できると思った。自分もいつか甲子園に出たい」と目を輝かせました。

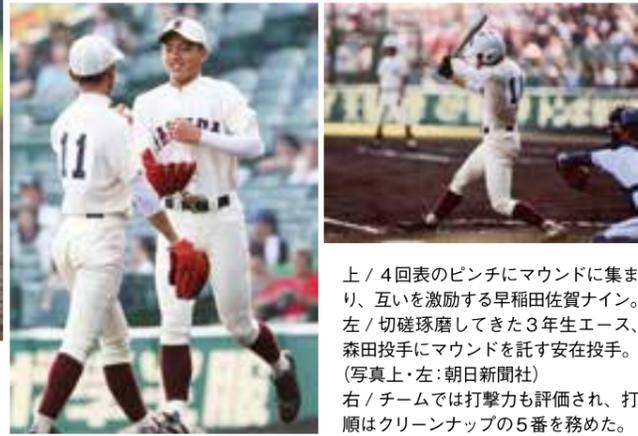
平元選手がその姿で見た夢は次の世代にとって、リアルで大きな目標として受け継がれていきます。

ATHLETE OF FUKUCHI

躍動、**福智のアスリート。**



安在 悠真 (早稲田佐賀高校2年生) ● 2000年8月1日生 赤池出身
169cm 64kg 左投左打。得意球種はスライダーとチェンジアップ。コースを突くコントロールと物怖じしない精神力で、打たせて取る投球が持ち味。



上 / 4回表のピンチにマウンドに集まり、互いを激励する早稲田佐賀ナイン。
左 / 切磋琢磨してきた3年生エース、森田投手にマウンドを託す安在投手。
(写真上・左:朝日新聞社)
右 / チームでは打撃力も評価され、打順はクリーンナップの5番を務めた。



後ろに控える森田投手を信じ、初回から全力投球する安在投手。(写真:朝日新聞社)



右 / 新チームは1・2年生合わせて27人。安在投手は唯一の夏のレギュラー経験者として、チームをけん引する。
左 / 投手専属の選手に行われる監督からのノックを、遅くまでこなす安在投手。
下 / 父も汗を流し、中学時代まで練習に励んだ赤池球場に掲げられた横断幕。ベアーズを始め多くの人が活躍を応援した。



「早稲田佐賀高校」
安在 悠真
Yuma Anzai
佐賀県代表、早稲田佐賀高校が初の甲子園出場。快拳を支えた福智出身のもう一人の左腕。努力の末につかんだ、夢のマウンド。

ATHLETE OF FUKUCHI
躍動、
福智のアスリート。

創 部8年目の早稲田佐賀高校が予選を勝ち抜き、初の甲子園出場を果たしました。躍進の立役者の一人、2年生左腕の安在悠真投手。169センチと野球選手としては小柄な体格ながら、正確なコントロールとピンチに動じないマウンド度胸を武器に、主に先発投手として活躍。3年生の森田直哉投手との2枚看板としてチームを初の快挙へと導きました。

「選を勝ち抜き、初の甲子園出場を果たしました。躍進の立役者の一人、2年生左腕の安在悠真投手。169センチと野球選手としては小柄な体格ながら、正確なコントロールとピンチに動じないマウンド度胸を武器に、主に先発投手として活躍。3年生の森田直哉投手との2枚看板としてチームを初の快挙へと導きました。」

悲 願の甲子園初戦、対戦相手は宮崎県代表の聖心ウルスラ学園。先発した安在投手は持ち前の精神力で緊張することなく、1回を三者凡退に抑える安定の立ち上がりでした。しかし4回、痛恨の失点を許し、降板。マウンドを森田投手に託して、ともに闘ってきたエースが後続を抑える姿を目に焼き付けました。その後も安在投手は1塁を守り継続出場。チームは7回に2点を返すなど奮闘しましたが、5対2で敗れ初戦突破は叶いませんでした。試合後、肩を落とす安在投手に森田投手が手を差し伸べます。「次はおまえが」

「願の甲子園初戦、対戦相手は宮崎県代表の聖心ウルスラ学園。先発した安在投手は持ち前の精神力で緊張することなく、1回を三者凡退に抑える安定の立ち上がりでした。しかし4回、痛恨の失点を許し、降板。マウンドを森田投手に託して、ともに闘ってきたエースが後続を抑える姿を目に焼き付けました。その後も安在投手は1塁を守り継続出場。チームは7回に2点を返すなど奮闘しましたが、5対2で敗れ初戦突破は叶いませんでした。試合後、肩を落とす安在投手に森田投手が手を差し伸べます。「次はおまえが」

KYUDO

佐藤 泉 Izumi Sato

● 1974年9月17日生 金田出身

練士5段。弓を引く姿に憧れ高校から弓道を始める。幾度かの休止を乗り越え実力を磨き、所属する福智町弓道連盟では若くして指導を行う実力者。



↑矢を射るときはより自分自身の内面に意識を集中すると語る佐藤さん。出場選手109人中24人の決勝進出者に入る活躍。

東 京で10月21日から2日間行われた全日本弓道遠的選手権全国大会に初出場を決めた佐藤さん。以前は育児のため弓道の練習を休まざるを得ませんでした。育休が明け、弓を引けることがうれしくて「たまらなかつた」との思いを鍛錬に込め、今回の躍進につながりました。復帰後「苦手だった遠的が不思議と当たるようになった」と声を弾ませた佐藤さん。県大会、九州大会と順調に出場を重ね、今年ついに全国への切符をつかみました。全国の予選では高い集中力を見せ、6射全てを的中させて決勝進出。しかし連日の疲労と

緊張から、決勝では惜しくも入賞を逃しました。悔しい結果にも「広い会場や大声援など独特な空気感を味わえた」と純粋に競技を楽しんだ佐藤さん。もう一度最高峰の舞台に立つことを夢見て、一心に弓を引き続けます。



↑遠的で60m先に設置される、直径1mの「遠的」。言葉以上に狙いづらい。

初の全国大会で決勝進出
自分自身と向き合う高い集中力

BASE BALL

金田Jrクラブ

Kanada Jr Baseball Club

2年前に甲子園優勝を果たした福島孝輔投手や平元銀次郎投手など優秀な選手を多数輩出する強豪チーム。「感謝と礼儀なくして技術の向上無し」をスローガンに、野球以外にも人格を育てる指導を行っている。



↑6月から「田川連盟旗」「鹿児島親善少年野球大会」「虹の松原旗争奪九州・山口少年野球大会」「田川連盟金鷲旗」の4大会で毎月優勝。

少 年野球チーム、金田ジュニアクラブが6月から4か月連続で優勝旗を手にしました。指導歴16年の嶋田監督も「今年の活躍は5年前の銀次郎の世代以来」と笑顔をのぞかせます。中でも8月の「虹の松原旗争奪九州・山口少年野球大会」は64チームが参加する大きな大会。クラブが20年以上参加し続けてきた目標の一つで、悲願の初優勝でした。「試合では元気に一生懸命練習する子を使う。野球ができる今の環境を大切にしてほしい」との監督の言葉通り、真剣に野球と向き合い結果を残し続ける選手たち。練習では監督不在で



↑時には厳しい言葉をかけながらも、選手に合わせた的確な指導で敬愛される嶋田英志監督。

も手を抜かず、自主的に励みます。最大の目標は県内350チームの頂点に立ち、全国大会へ出場すること。より高い目標を目指し、今日もグラウンドに大きな声が響きます。

ATHLETE OF FUKUCHI

FOOT BALL

中村 颯真 Soma Nakamura

● 2007年1月24日生 赤池出身

ポジションはFW。金田SSCに所属後に、小学4年生でアビスパ福岡ジュニアユースに合格。ゴールへの意識と持久力を指導者から高く評価されている。



↑岡崎選手のような泥臭くもチームに貢献するプレを意識し、高い持久力で試合後半まで相手にプレッシャーを与え続けるのが持ち味。

厳しい競争を勝ち抜き海外へ
世界のレベルを肌で感じた10日間

市 場小5年の中村颯真くんが、将来プロを目指すジュニア選手を育成するASLJ選抜に合格し、9月10日から10日間の海外遠征に参加しました。全国から有力な選手が集まるセレクションで、倍率8倍の厳しい選考を突破。ドイツとスペインで優秀な選手たちとの試合や練習をする貴重な機会を得ました。昨年からJリーグの下部組織に所属し、高レベルの環境に身を置く中村くん。週4回、福岡市でのチーム練習に向かい、帰宅後も自主練習を行い技術を磨いています。「サッカーはいつも楽しい。練習をつらいと思っ



↑自分より大きく、動きの速い海外の選手と対戦し、先の動きを読む大切さを知ったという中村くん。

たことはありません」と笑顔で答えた中村くん。夢は憧れの日本代表、岡崎選手のような世界で活躍するプレイヤー。海外で得た経験を糧に、さらに高いステージを目指します。

KYUDO

原口 勝利 Katsutoshi Haraguchi

● 1960年4月12日生 神崎出身

教士6段。近的大会では昨年まで3年連続で全国大会に出場。通常は10年以上かかる教士への昇進をわずか3年で果たすなど多くの実績を重ねる。



↑周囲に張り詰めるような緊張感を漂わせる。矢を放つまでの洗練された所作は、経験者からも弓道の型の手本のようにと評される。

近的に続き遠的でも全国出場
鍛錬に裏打ちされた自信と平常心

佐 藤さんと同じく、全日本弓道遠的選手権全国大会に初出場を決めた原口勝利さん。多数の入賞歴を持つ原口さんですが、競技を始めたのは30歳を過ぎてから。打ち込んできたバスケットボールに体力的不安を感じていたころ、近所の経験者の勧めを受けてのスタートでした。トラック運転手の不規則な勤務の合間に打ち込む週3回の練習。「いつも通り引けば、いつも通りあたる」とあくまで平常心で試合に臨み結果を残してきました。そして10月21日に迎えた全国大会。決勝進出がかかる最後の1射は、強雨の中わ



↑福岡県から男女3名ずつが全国大会に進める中で、福智町から2名進出したのは異例の快挙。

ずかに的下にそれました。「最後に雨で目測を誤った。まだまだです」と目を細めた原口さん。これからも福智町の弓道をけん引する存在として、さらなる高みを目指します。

JUDO 杉 虎乃介

Toranosuke Sugi

● 1999年4月5日生 伊方出身

階級は100kg超級、得意技は払腰。6歳で柔道を始め、多くの実績を挙げる。高校進学後は勝負強さを買われ、先鋒として1年生からレギュラーに定着。



↑ 厳しい走り込みで培った体力と130kgの体重を感じさせない軽快な動きを武器に、予選から全試合で勝利を収めた杉選手。

大分県の強豪校、柳ヶ浦高校に山形県で行われた全国高等学校柔道選手権大会の団体戦で好成績を納めました。杉選手はほぼ全試合に出場し、引き分けすらなく全勝。柳ヶ浦高校史上最高成績となるベスト8入りに大きく貢献しました。有力選手が各地から集まり、厳しい練習で知られる同校。「16km走り、そのまま練習」ということもあった。つらかったけど苦しいときに力を発揮できる体力と精神力を養えた」と振り返ります。全力を尽くした試合後に「柔道が好きで

す。これからも柔道が続きたい」と語った杉選手は、卒業後、山口県の強豪・徳山大学に進学予定。大学でも柔道に打ち込み、もう一つの目標である教師になる夢も追います。



↑「全部出し切った。後悔はありません」と語り、試合後に仲間たちと笑顔を見せる杉選手(左下)。

柔道に打ち込み続けた3年間 高校生活の集大成を飾った全国ベスト8

ARM WRESTLING 山本 光明

Mitsuaki Yamamoto

● 1969年4月6日生 金田出身

腕力に自信があったものの、25歳の頃に参加した大会の2回戦敗退を機に競技にのめり込む。自ら指導を行いつつ、息子2人と一家で技術と力を磨く。



↑ 得意の右腕では倍ほども年の離れた長男の翔也くんを圧倒。常人の太ももほどに太い両腕は40kgのダンベルを片腕で持ち上げる。

飯塚市で9月24日に行われた第9回九州アームレスリング選手権大会に出場した山本光明さん(48)が、3階級で入賞を果たしました。山本さんは今大会に向け、初めて大幅な減量を実行。半年前には90kg以上あった体重を15kgも落とし、大会に臨みました。自分より若い出場選手が大多数を占める中、3つの階級で20回以上対戦。右腕の75kg級で優勝、85kg級で準優勝、左腕の85kg級で3位入賞と圧倒的な成績を残しました。大会後も仲間たちとの実戦練習や自宅でのウェイトトレーニングを欠かさず続ける山本さん。

「目標は東京オリンピックの年に開催されるアジア選手権。やれなくなるまで競技を続けたい」と額の汗をぬぐいました。2020年には52歳を迎える山本さんの「年齢を超えた挑戦」はこれからも続いていきます。



↑ 3階級でメダル獲得の活躍で、全出場者から1名に贈られる敢闘賞も受賞。

自慢の左右の腕で3階級入賞 年齢差を跳ね返す鍛え上げられた肉体

ATHLETE OF FUKUCHI

RUN 井上 憲治

Inoue Kenji

● 1956年6月18日生 金田出身

日本体育大学を卒業後、体育教師として赤池中に赴任し、伊方小・市場小などで校長を歴任。マスターズでは毎年優勝候補で、100mのベストは12秒62。



↑北九州市で10月22日に行われた全九州マスターズ陸上の60歳以上の部に参加した井上さんは60m走、100m走、200m走を全て優勝。

大切なのは目標を掲げ挑む努力 走り続ける姿で伝えるスポーツの力

現役ランナーとして、60歳を超えた今も走り続ける井上憲治先生。学生時代は長距離走に打ち込み、56歳で始めた短距離走では、年齢別の大会で毎年優勝候補に挙がる実力者です。「短距離では逆に息子が先生。スポーツに年齢は関係ない」と校庭を走る子どもたちを見つめます。退職後も市場小で講師として子どもへの体力向上を支援、希望する児童には放課後でも走り方や練習方法を教える井上先生。「運動が苦手な子や競争に負けた子も、自分の成長を感じたときに喜びを実感できる。無駄な努力は一つもないんで



↑8月、青の勝負着で挑んだ宮崎大会で全国1位の選手を相手に僅差の2位。

す。人と競うことより、大切なのは自ら目標を掲げ、それを越えようとする努力」と力を込めて語りました。中学で陸上と出会い、駆け抜けた50年。スポーツが持つ力を誰よりも知る井上先生は、走る姿でその魅力を伝えるアスリートであり続けます。

特集／躍動、福智のアスリート。【完】

BATON TWIRLING

近畿大学附属福岡高校 バトン部

Kindai University Fukuoka High School Baton Club

学問とスポーツの両面で優秀な成績を納める近畿大学附属福岡高校(飯塚市)。世界大会出場、全国大会出場などの実績を持つバトン経験者が部員15人中4人。未経験者とのバランスにも優れたチーム。



↑ 福智町出身の4人。3年の細川未久さん(中央上)、2年の長谷川彩希さん(右)、宮本菜々都さん(中央下)、大井夢叶さん(左)。

心一つに臨んだ九州予選 チームの結束でつかみとった金賞

福智町出身の4人が所属する近畿大学附属福岡高校のバトン部が、10月22日に鹿児島県で行われた九州予選のバトン編成部門に出場しました。ダンスやバトン技術をはじめ、選手12人の隊形や動きの統一も、競技の重要な採点要素。他の強豪校と比べ経験者が少なく厳しい条件でしたが、細川未久主将は「未経験から始めた分、チームの結束が固い。1曲を大事に全力で挑みたい」と大会前に抱負を語っていました。迎えた当日、結果は5位。悲願の全国へは一步及びませんでした。だが、優秀な演技が評価され金賞



↑ 顔の向きや腕の角度など細部まで統一するため、同じ動作を反復練習。

を受賞。顧問の益永教諭は「ミスもあつたが、位置取りや動きは今まで一番統一されていた」と健闘を讃えました。今後は11月に行われる3年生最後の大会で、全員が心を合わせた最高の演技を目指します。